

若者たちの思い

私たちの未来のために 今、私たちにできること

高校生、そして大学生は東日本大震災を契機に何を考え、今をどう生きているのか。次代を築く彼らの思いと未来への決意に耳を傾ける。

「育てられたエリート」として
感謝の心で福島と向き合う

福島県立安積高校 卒業生

お話を
うかがった方々

東京大文科 2類2年 依田浩崇さん
東京大文科 1類2年 太田絵梨子さん

重い荷物を背負うことになった
福島の後輩たちのために

2011年12月26日、年の瀬もいよいよ押し詰まったこの日、福島県立安積高校に東京大や京都大などの学生約15人が集まってきた。難関大を志望する1、2年生を対象としたセミナーで講師を務めるためだ。安積高校では10年度、東京大を志望する1、2年生を集めた2泊3日の「安積

セミナー」（本誌11年10月号で紹介）を始めた。11年度にも8月と12月に実施されたが、12月は福島高校の生徒、そして卒業生も参加して「安積・福島合同セミナー」（セミナーの様子）は9ページ参照）として開催された。この企画で中心的な役割を果たしたのが安積高校の卒業生、依田さんと太田さんだった。

依田 高校時代、私たちの学年では、東京大を訪問して先輩や教授の話を

聞くなど、将来へのモチベーションを高める取り組みが行われました。そして卒業後は、母校の先生方の求めで後輩たちに進路や学習についてアドバイスするようになりました。こうしたことが土台にあって、今はセミナーの企画立案から携わっています。母校の後輩のために力になりたいです。恩師が私たちにしてくれたことを受け継ぎたいという思いです。

太田 東京大生になった自分が直接話すことで、多少なりとも後輩の力になれるのではないかと思います。福島県の公立高校から東京大に進学する生徒は決して多くありません。学力はあるのに、あと少しの支援が得られず後輩たちが東京大に合格できない現状があるのだとしたら……。

高校生の力ではどうにもならない理由で、将来の可能性が狭められるような状況を変えていきたいと思いました。

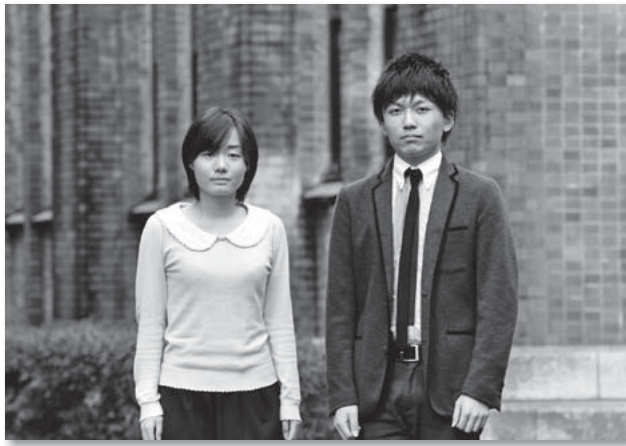
セミナーの内容自体は、10年度と11年度では大枠の変更はない。だが、参加する生徒と大学生の意識は大きく変わった。東日本大震災と、その後の福島第一原子力発電所の事故によつてだ。

依田 福島の高校生は、本当に大変な思いをしています。将来の展望は厳しく、自分の未来に対してもシビアにならざるを得ないでしょう。震災や原発の事故によつて重いものを背負わされた後輩たちと一緒に、これからどう生きていくかを考えていきたいです。私の知識や経験を高校生に伝えることで、将来の指針や大

*2012年4月より、依田さんは東京大法学部第2類公法コースに、太田さんは東京大教養学部超域文化科学科言語情報科学科に所属

学選びなどの参考にしてもらえればと思いますし、そうすることで、福島に貢献したいと思います。

太田 震災以後、高校生と話をしていると、地元志向がより高まっていると感じます。もちろん地元志向が



写真右から、依田浩崇さん、太田絵梨子さん

福島県立安積高校○全日制／普通科／共学。1学年約320人。1884(明治17)年設立。2001年度男子校から共学となる。「開拓者精神」「文武両道」「質実剛健」を教育の精神とする。

悪いわけではありませんが、たまたま福島に住んでいたことで、将来の選択肢が狭められているのではと思うのです。私は、福島の高校生こそ、東京大などに進んで日本の各界を引っ張ってほしいと思います。福島で震災を経験した子どもたちが日本のトップにならない限り、今回のような事態はこれからも繰り返されると私は思います。

依田 福島の高校生を、自分には関係ない存在だと見過ごすことは出来ません。もし自分が高校生の時に震災があったらということをよく考えます。勉強に集中できない日々が何か月も続いて、それでも私は東京大に合格できたのだろうか。たぶん合格できなかったと思います。今の高校生が実際にそういう体験をしていると思うと、福島先輩の1人として、申し訳ないような気持ちで胸がいつぱいになってしまいます。

エリートとは 自己を犠牲に出来る者

故郷を、そして母校を思う気持ち

安積・福島合同セミナー

東京大や京都大を志望する安積高校、福島高校の1・2年生を対象とした、2泊3日のセミナー。2校での初めての合同実施となった今回、1年生は福島高校、2年生は安積高校の校舎に集まり、活動が行われた。大学生による大学の学問の解説、高校時代の勉強法の紹介などに加え、2日目にはバスを利用した東京大訪問も盛り込まれた。教師のサポートの下、大学生主体で進められた企画運営では、「大学生ならではの観点で話す」「高校生と直接語り合う時間を多くする」「安積高校と福島高校の生徒同士のつながりをつくる」といった留意点が盛り込まれた。



安積高校に集まった2年生22人を前に自己紹介する大学生

得意教科・不得意教科でグループに分かれて、学習法などの質疑応答が行われる



は誰にもあるはずだ。だが、依田さんと太田さんのその強い思いと行動力は、誰もが持てるものではない。

依田 望むと望まざるとにかかわらず、いわゆる「エリート」と呼ばれる立場になった人は、自分の幸福を

願うばかりでは許されないとします。高校時代、私は東京大生に対して「自己犠牲の義務を果たそうとする意思を持つ者」というイメージを抱いていました。ところが、入学して実際に目にした東京大生は、私の

*プロフィールは2012年3月時点のものです

特集

他者のために学ぶ

震災から1年後の、生徒と教師

想像とはだいぶ違うところもありました。では、自分は義務を果たすために何をやるのか。そう考えた時に、地元・福島が選択肢の1つとして浮上したのです。18年間育った土地ですし、恩返しというか、自分にはかわる義務があると思いました。

太田 私も依田君も文科一類ですが、同じ科類の人の多くが国家公務員や法曹を目指しています。でも、「この人がこのままエリートのを進むのか」と、不安を感じてしまうような人も少なからずいます。私はそうした人たちは、誰かに何かをしてもらったという意識を持つ機会があまりなかったのだと思うのです。高校生の中には予備校や塾の講習、高価な教材など、いろいろなものが利用できる人もいるでしょう。でも、私たちはそうではありませんでした。あったのは、高校の先生に熱心に教えてもらったという経験です。私たちの先生は、自分の時間をつぶしてでも、私たちのために教えてくれました。

育ててもらった経験が 感謝の心を育てる

育ててもらったという経験がたく

さんあるから、自分も何かをしたいと思う。それは自然な感情だと2人は言う。何かをしてもらったという経験がなければ、自分が何かをしようとも思わなかっただろう、と。

太田 福島は、学校が一番のよりどころにならざるを得ない地方だから、せめて生徒には手を尽くしてやろうと安積高校の先生方は考えていたのかもしれない。都市部の高校を卒業した東京大生は、自分の後輩に「自分1人で出来るよね」と言えるのかもしれない。でも、福島は違います。私が後輩に「自分1人で出来るよね」と言っても、そう言われた後輩は困ってしまいます。まして、震災以降はなおさらです。私が何かを話すことで少しでも東京大に近づけるのなら、話をしなくてはいけないと思っています。

依田 高校時代、添削された答案を見ると、先生がいかに手を掛けてくれていたかが分かりました。きつと家族と過ごす時間を削って書いてくれたんだろうと思いました。答案1つにしても、先生がしっかり時間を掛けて、思いを込めて生徒に返してくれたものを見れば、生徒はそれを

育ててもらった経験だと受け止めます。それが積み重なることで、地元で一生懸命勉強する後輩のことを、自分には関係ないと思わずに、自分だったらどうしただろうと考えられるようになるのだと思います。先生に育ててもらったことで、私たちは感謝することを学びました。

社会の一員としての責任感、他者に対する義務意識は、自然発生的に芽生えるものではない。家庭や学校での、豊かなかわりの中で育てられたからこそ芽生えるのだ。依田さんと太田さんはそう信じている。

依田 育てられる中で経験した感謝

生徒の感謝の気持ちは 教師のどのような指導が育んだのか

周囲への感謝の思いや責任感、いかにして生徒の中に生まれたのか。依田さんの高校時代の担任である遠藤先生、そして安積・福島合同セミナーの中心的役割を担った1人である森下先生が振り返る。

◎あの時の担任団は、「それは生徒のためになるのか？」と本気でぶつかり合う、とても熱い集団でした。そんな教師たちの夢と情熱が、東京大13名・京都大3名合格という実績と共に、「後輩の力になりたい」と行動を起こす卒業生たちを育む土壌となったのではないのでしょうか。今は後輩だけでなく、私たち教師も支えてもらっています。ありがたいことです。彼らの熱意に応えるためにも、安積・福島合同セミナー以上の企画を考えていかないといけない、と思っています。(福島高校/遠藤直哉)

◎安積高校の生徒は愛校心がとても強く、先輩を敬い、後輩を大切にしている生徒が多くいます。一声掛けると、卒業生は後輩たちのために集まってくれます。以前から先輩のアドバイスは、後輩たちの「やる気」や「可能性」を引き出す原動力の1つだと考えていました。セミナーを通して、精神的に一段と成長した卒業生と、そのアドバイスを真剣に捉え、自身の未来を切り開こうとする在校生の姿に、安積高校の歴史と伝統を感じました。(安積高校/森下陽一郎)

の連続によって、責務を果たそうという気持ちが生まれてきます。東京大生でなくても、そうした感謝の気持ちを強く持っている人はたくさんいますから、どこに進学したかは関係ないと思います。ただ、目標までの道のりが険しいほど受け取るものは大きいし、受け取る機会も多いはず。僕らの取り組みが、東京大を目指す後輩たちの心に、育ててもらった経験として積み重なっていったら、後輩たちもまた、彼らの後輩たちにお返しをしようと思うでしょう。そうなれば福島は、いえ、日本はきっともつと良くなっていくはずですよ。

*森下先生は2012年4月より福島県教育庁高校教育課に勤務

福島で培った「諦めない気持ち」を胸に これからも歩き続ける

福島県・私立尚志高校

お話を

うかがった方々

三瓶 陽さん（3年・サッカー部主将）
後藤拓也さん（3年）

「福島のでしこ」に！
逆境からの挑戦が始まる

2012年第90回全国高校サッカー選手権大会で、尚志高校は福島県勢初のベスト4入りを果たした。東京電力福島第一原子力発電所の事故により、部活動は一時休止に追い込まれるなどしたが、そうした逆境を乗り越えての快挙だった。

後藤 原発事故が起きた直後、仲村監督はマイクロバスを運転して、寮で生活する部員をそれぞれの自宅まで送り届けてくれました。家族に会えるのはうれしかったのですが、地震後はずっと一緒にいた仲間と離れるのは寂しかったし、この先いったいどうなるのかとても不安でした。

三瓶 冬にたくさん走り込んで、これから本格的に練習を始めようとしていた時期だったんです。それなのに練習が出来ない日が何日も続いてしまつて……。本当にもう一度皆とサッカーが出来るのか、先のことが気がかりで落ち着きませんでした。

4月中旬になって、チームはようやく郡山市で練習を再開した。だが練習は、放射線量を測りながら1日2時間まで。雨天時には屋内での練習となった。

後藤 練習時間は減ったけれど、その分、皆で集中して取り組みました。そして、練習中は他のことを忘れて、心からサッカーを楽しんでいました。仲間とは、これから遅れをどう取り戻していくかも話しました。練習時

間が少ないのだから、意識をもっと高めようと話をしました。

三瓶 普段、監督は僕らのモチベーションを高めるため、サッカーのゴールシーンを集めた映像を見せてくれるんです。でも練習が再開してからは、震災のために部活動が出来なくなった高校を取り上げたニュースや、一流スポーツ選手が「頑張っている姿を見ることが今は一番大事だ」と語る映像を見せてくれました。何回も繰り返して見るうちに、サッカーが出来ることはすごく恵まれていることだと思ふようになりましたし、部活動が出来ない高校生の分も頑張らないといけない、と責任を感じるようになりました。

7月、女子サッカーワールドカップで日本代表が初の優勝を果たした。震災以降、久々に国内に明るいニュースが流れた。いつしか仲村監督は部員たちに「高校生の君たちの頑張りで、福島の人たちに元氣と勇氣を与えよう」「福島県にとってののでしこになろう」と呼び掛けるようになっていた。

誰かのために頑張る
だから最後まで諦めない

全国高校サッカー選手権大会、尚志高校は12年1月2日に行われた2回戦からの登場となった。



写真右から、三瓶陽さん、後藤拓也さん
福島県・私立尚志高校◎全日制／普通科・情報総合科／共学。1学年約430人。1964（昭和39）年設立。「尚志必成」「即是道場」「瞬即永遠」を建学の精神とする。

*プロフィールは2012年3月時点のものです

後藤 監督が言うように、自分たちが頑張ることで福島の人たちに勇気や希望を与えられるのか、正直信じ切れない部分もありました。でも、大会で勝ち進むうちに、本当に自分たちが優勝して福島の人に元気を与えたいと思うようになったんです。「福島県のでしこ」になるのは夢ではないかもしれないと、僕らの中で現実味を帯びてきました。

三瓶 試合中の声援もそうですが、試合前にも応援のメールをたくさんもらいました。震災があつてから、ずっと多くの人に支えられていたのだと実感しました。その人たちのた

めにも頑張りたいと思いました。正直、これまでは誰かのためにサッカーをやるという気持ちはありませんでした。でも、自分を支えてくれた人たちのためにやるんだと思うと、すごくやる気になりましたし、頑張れました。監督は以前から「サッカーが出来ることに感謝しなさい」「家族に感謝の気持ちを伝えなさい」と僕らに言っていました。震災があつてから、試合前に家族にメールする人がとても多くなりました。周囲に対する感謝の言葉を口にする人も増えて、部内の雰囲気は以前にも増して明るくなったと思います。

準決勝（5回戦）まで勝ち進んだ尚志高校だったが、三重県立四日市中央工業高校を前に1対6の大差で敗れ去る。

後藤 準決勝では、前半に2点先制されたので、後半は点を取り返しに行こうと攻撃的になったところ、更に点を取られてしまいました。結果的に点差は広がりましたが、誰も諦めてはいなかったです。諦めたら、ここまで応援してもらった人に申し訳ない。諦めることだけは絶対にしなくないと思いました。その気持ち

は、全員で最後まで貫いたと思えます。

三瓶 点差を考えず、今出来ることを全力でやろうという気持ちでした。どんなに焦っても、サッカーは1点ずつしか点が取れないのですから。

感謝の気持ちを忘れずに 福島のために福島で生きる

「自分を支えてくれた人たちのために頑張ろう」。そう決意したからこそ、尚志高校サッカー部は最後の瞬間まで全力を尽くすことが出来た。

後藤 負けた瞬間は悔しさでいっぱいでした。でも地元に戻ってから「勇

気をもたらった」「元気をもらった」といろいろな人たちから言ってもらって、やっぱり自分たちは間違っていないなかつたと思いました。

三瓶 時間が経つにつれて、ここまですべて来られてよかったという気持ちが大きくなりました。ベスト4という結果は誰もが経験できるものではないし、自分の財産にもなると思います。3年間の部活動も納得いくものだったと思うので、後悔はありません。

福島の人たちに力を与えようとした尚志高校サッカー部は、福島の人たちからも大きな力をもらっていた。

部員たちの頑張りを 監督はどう見守ったのか

逆境の中にあつた生徒たちは「最後まで諦めない」という力を手に入れた。震災、そして原発事故という状況下で、監督は部員たちとの結びつきをなお一層強めていった。

こんな状況で、サッカーをやっているのか。何度も自問しました。でも、選手は戻ってきてくれた。それならば監督として中途半端なことは出来ません。選手権大会で活躍して、福島の高校生が頑張っている姿を全国の人に見てもらうことは、福島県の人たちのためになるはずだ。選手たちは「僕たちはサッカーで頑張る他ない」というイメージを持つことができ、それがチームに団結力を生み出した。

準決勝で先に2点を取られても、「必ず勝てる」「絶対に諦めない」と信じていました。でも後半にも4点を取られて、監督としてはどこかで「勝つことは出来ないだろう」という思いもありました。でも、それでも諦めてはいませんでした。福島のために希望の1点をもぎとろう、諦めない心分かしてもらおうと思って「1点！1点取るんだ！」と、選手に向かって叫び続けました。そして、1点が入ったのです。あの1点には、それまでの勝利以上のうれしさがあつました。（サッカー部監督／仲村浩二）

後藤 僕は4月から岩手大の教育学部に進学します。サッカーは続ける予定で、将来は体育の教師になって福島に戻りたいです。福島の子どもたちに、スポーツの楽しさと、スポーツの持っている力を伝えたいと思います。そして、これからもずっと、感謝する気持ちを忘れないで過ごしていきたい。震災があつて、いろいろな方にお世話になって、人とのかわりの大切さを学びました。大学

に行っても、そして就職してからも、人とのかわりを大切にしたいと思っています。
三瓶 僕は地元の建設会社に就職します。一生懸命働いて、貴重な経験をさせてくれた尚志高校に恩返しをしたいです。監督はよく「ビッグな大人になって、サッカー部に寄付してくれ！」って言うんです。だから、早く社長になってサッカー部を応援したいと思います。

高校生の自分に出来ることを問い続け、日々勉強に取り組む

岡山県立勝山高校

お話を

うかがった方々

西村洋輝（2年） 難波貴弘（2年）

中山萌（1年） 丸山彩季（1年）

**被災地と自分がかかわれるのか
悩み、模索した生徒たち**

東日本大震災発生後、岡山県立勝山高校ではすぐに生徒会による募金活動が始められた。報道される被災

地の様子は、遠く離れた地で生活する生徒たちにも大きな衝撃を与えていた。

中山 瓦礫だらけになった町の様子をテレビで見ても、日常が日常でなくなるってどういうことなんだろうかと

と考えました。外を歩いている時に「今私が歩いているこの道がなくなってしまったら」と想像することもありました。当たり前前の日常のありがたさを感じました。

丸山 でも、遠く離れた被災地のことをいつも考えながら生活していたかといえど……。2週間、3週間と時間が経つにつれ、話題にすることがもだんだん少なくなっていくように思います。高校生の自分に出来ることといえど募金ぐらいで、自分がかかわるべきこととして考え続ける人は多くなかったのではないかと私は思います。

そんな中で生徒たちは、全国の高校生が震災をきっかけに考えたことを文章にまとめ、Web上で発表するベネッセの「高校生レインボープロジェクト」への参加を担任から勧められた。震災発生から2か月後の2011年5月のことだ。

中山 「面倒だ」といつて書かない友だちもいました。「どんな言葉で書けばよいか分からない」という子も多かったです。私も「被災地の人が読

むとは限らないし……」と参加を迷いましたが、自分の考えたことを形にする良い機会だと思いました。

丸山 震災が起こったけれど、私に特別なことはしていなかったし、自分出来ることは特になく思っ



写真右から、西村洋輝さん、丸山彩季さん、中山萌さん、難波貴弘さん

岡山県立勝山高校◎全日制／普通科・ビジネス科
共学。1学年約160人。1911明治44年設立
「英知の涵養」「自主性の樹立」「実践力の養成」「和礼・勤の徹底」「身体の鍛練」を教育目標とする。

*プロフィールは2012年3月時点のものです

いました。でも、この企画に参加すれば、もしかしたら自分の思いが現地の人に届くかもしれない。そんな可能性が少しでもあるのなら自分の考えを書いてみようと思い、参加しました。

震災以降の自分を内省し、「高校生レインボープロジェクト」に寄せられた他の高校生の考えに触れることで、生徒の心は改めて大きく揺れ動いた。

中山 全国の高校生のメッセージを読んで印象的だったのは、「私たち若者が日本を変えていくんだ」という言葉です。復興は、国が決めた計画に従って進められていくものだと私は思っていました。でもそれは違うんだ、私たち皆で進めるのが大事なのだと、改めて思ったのです。

丸山 全国には節電やボランティアなど、自分が出発することを既に行動に移している高校生がたくさんいることを知りました。私は「自分に出発することをやろう」と頭で考えたことはあっても、「もっと自分に何か出来ることはないのか」とは考えていなかったんです。高校生は微力かもしれないけれど、それでも実際に行

動している高校生が全国にいることを知ったら、被災地の人たちも励まされるだろうなと思いました。

出来ることはささやかでもそれは被災地とつながっている

「微力であっても、自分たちが出来ることをやろう」。その思いは、いつから生徒の中に広がっていったのだろうか。生徒の感情が表出したのが、5月30日に行われた生徒会役員選挙だった。

難波 副会長候補として「被災地の方は今、とても大変な思いをしている。僕たちは当たり前前の生活が送れることに感謝し、自分たちが出来ることをして学校を盛り上げていこう」と訴えました。

西村 被害を受けていない僕らは、もっと元気を出せるはずだ。だから、会長候補として「まずはしっかりと挨拶をしよう」と提案しました。

勝山高校では、震災関連の特別授業やLHRは行わなかった。だが「今出来ることをやろう」と教師たちは日々の授業の中などで折に触れて声を掛け続けていた。

西村 先生は「今、君たちが出来る

生徒の思いを教師はどう受け止めたか

今回の取材は、勝山高校の教師にとっても「震災を契機に、生徒は何を考えたのか」を知り、「その気付きを、これからどう生かしていくのか」を考える機会になったという。

◎振り返ると、震災をきっかけに生徒がどんなことを考えているのか、じっくり聞く機会はありませんでした。しかし、私が想像していた以上に生徒たちはよく考えていました。彼らの将来に大きな希望を感じました。(1学年担任/前田竜一)

◎本校の生徒たちは本当に素直です。地域の人たちに元気よく挨拶し、災害時の募金活動にも積極的です。素直で、人の気持ちを思いやれる生徒だからこそ、「今出来ることは勉強だ」という私たちの言葉も受け入れてくれたのでしょう。(2学年担任/野本竜太)

◎私たち教師は、普段、生徒に対して一方的に話す場面が多くなりがちです。本校では今、総合的な学習の時間を、生徒が実社会で体験し、感じ、考え、行動するものへと再構築しています。生徒の思いを引き出す活動をもっと積極的に行ってきたいです。(1学年主任/竹内稔)

◎私たちの言葉に向き合って、ずっと吸収する生徒を見て、我々の日々の指導がどれほど重要なのか、改めて実感し、責任を感じています。震災をどう受け止めるのか、生徒なりにもがいていたことが分かった今、我々は何をすべきか、深く考えています。(教頭/三浦隆志)

ことはたくさん勉強することだ」とおっしゃいました。僕は、それまで卒業したらずぐに就職するつもりでしたが、進学してもっと勉強して、公務員を志望する気持ちも湧いてきました。もっと勉強することで、社会に役立つ人間になれるのだと今は思っています。前よりも勉強に対するやる気が出てきたし、社会のために勉強するんだという気持ちを持つようになりました。

難波 卒業して社会に出て、一生懸命働くことが、復興のために僕に出

来ることなのだと思います。就職は甘くないのだから、今こそ勉強しないとイケないと思っています。

中山 若者が社会を変えていくためには、今は勉強して、将来社会を変えていく力を蓄えることが大切だと考えるようになりました。勉強して、社会を変えることが出来る人間にはなりたいたいです。今出来ることはささやかなことばかりだけれど、将来出来ることはいっぱいあるはずだから、将来のために今、勉強を頑張ろうと思っています。

被災者や全国の高校生と語り合い、 「高校生だから出来ること」を続ける

兵庫県立舞子高校

お話を
うかがった方々

久保力也さん（2年） 高橋 睦さん（2年）

自分の目で見ることで 初めて災害の脅威が分かる

兵庫県立舞子高校は2002年度から、全国で初めて防災教育を推進する専門学科「環境防災科」を設置。阪神・淡路大震災での経験、教訓を継承し、地域の防災に有為な人材の育成に取り組んでいる。ボランティアに対する生徒の意識は高く、国内外で自然災害が発生した際には生徒は迅速に募金活動などを開始するという。東日本大震災では、5月7日から環境防災科の3年生、2年生、1年生、そして普通科の希望者の順で宮城県に行き、1週間ずつ支援ボランティアを行った。

久保 参加には保護者の承諾が必要

でしたが、環境防災科は全員参加しました。震災発生から2か月弱という時期でしたが、現地入りには不安はありませんでした。でもそれは、僕らが防災や自然災害の脅威について学んでいるからではなく、自然災害を実際に体験したことがないからだとなって気が付きました。

高橋 不安があったとすれば、被災地で自分が役に立てるだろうかということでした。現地が危険かどうかといった不安はありませんでした。

津波による被害の大きさは、テレビ映像を通して理解していた生徒たちだったが、現地に立って実際に自分の目で見たことで、自然災害の恐ろしさを体全体で実感した。

久保 自動車や家屋が流される様子

を見て、津波は怖いものだと思っていました。でもそれは、テレビの画面を通じた映像でしかありません。津波によって積み重なった瓦礫の高さが「10メートル」だと言われても、僕が見ていたのはテレビ画面の中の10メートルです。しかし、被災地に立って自分の目で見上げて初めて、10メートルがどれほどの高さなのかを実感し、本当に怖いと思いました。

高橋 テレビのニュースを通して、被害の大きさは頭では理解できていましたが、それでも実際に見ると圧倒されました。震災が起こった時にこの町にいた人は本当に恐ろしかっただろうし、全てが流されてしまった光景を見れば、誰もが絶望感に襲われるだろうと、被災地の人の立場になって想像しました。そして、心底怖いと思いました。

被災者のために高校生として 出来ることをしていく

被災地での活動の中心は、泥かきなどの家屋の片付けだった。

久保 外から見ると大きな被害はな

いように見える家も、中に入ると見ると泥だらけでとても住める状態ではありませんでした。泥かきだけで何日も掛かることがあるし、きれいに片付くまでには更にまた日数が掛かります。僕らに出来ることはほん



写真右から、久保力也さん、高橋睦さん
兵庫県立舞子高校◎全日制／普通科・環境防災科／
共学。1学年約280人。1974（昭和49）年設立。
2002年に環境防災科を設置。校訓は「誠実」「健
全」「親愛」「勤勉」。

*プロフィールは2012年3月時点のものです

特集

他者のために学ぶ

震災から1年後の、生徒と教師

の少しなのに、被災した方々は心から「ありがとう」と言ってくれました。元に戻るまでを考えると、作業はまだ何百分の1しか終わっていないかもしれないのに、こんなに感謝してもらっているのかと思うくらいです。

被災体験に耳を傾ける「傾聴」も、生徒たちが出来る大切なボランティア活動の1つだった。

高橋 避難所で生活する被災者の方々とは、最初は雑談をしていても、いつの間にか被災体験の話になりました。現地入りする前、先生からは「そういう話になったら、ただ聞くだけ、うなずくだけでいい」と教えてもらっていました。「うなずくだけでいいの？」と思いました。実際に家族や友だちを亡くしたといった話を聞いた時には、ただうなずくことしか出来ませんでした。

久保 被災者の方々と話していて、僕らが神戸から来ていることを知ると、決まって「遠くからわざわざ来てくれてありがとう」と言ってくださいました。日本中が被災地のことを忘れていないと、被災者の方たちに伝えることが大切なのだと思います。

高校生未来プロジェクト「10年後への決意」

～震災後の日本をボクらはどう生きるのか～

- ◎実施日 2012年3月3日(土)、4日(日)
- ◎参加者 高校生47人(Webにて参加者を募集し、作文審査により決定)
- ◎主催 ベネッセコーポレーション
- ◎スタッフ ベネッセコーポレーション「高校生未来プロジェクト」メンバー
ファシリテーター:NPO法人ミラツク、ボランティア:青山学院大学生(14人)

震災後私たちベネッセの社員は、高校生がいろいろな思い、考えを持っていることを、全国の先生方や学校営業担当者の声を通して知りました。ベネッセとして、高校生が自分の考えを発表し、他の高校生の思いを聞ける「場」を作ることが大切なのではないか。そうした声でベネッセ教育研究開発センターを中心に上がり始めました。そして、各校の先生方の協力を得ながら、全国から高校生を募集し、ワークショップを行うことになったのです。

高校生のほとんどは、お互い初対面でした。震災の影響が異なる者同士が、わずか2日間で課題意識を共有し、未来への決意にまで昇華させることが出来るのか。事前に十分な検討を重ねたとはいえ、やはり私たちには不安もありました。



けれども、初日、自己紹介を経て、グループを替えながら語り合ううちに、高校生は互いに以前からの友人のように接し始めていました。高校生の柔軟性の高さに、私たちは驚かされました。

語り合いを経て、それぞれの10年後の決意にたどり着いた高校生からは「すごい仲間と出会えて刺激になった」という声が上がりました。多様なバックグラウンドを持った高校生が結び付いたからこそ、そのような声が上がったのでしょう。大学生ボランティアが、高校生の課題意識の高さに背中を押され、「自分たちも議論しよう」と空き時間に疑似ワークショップを始め一幕もありました。まさに、高校生の決意が周囲に伝播した瞬間でした。

(ベネッセ教育研究開発センター／岡部悟志)

参加した 高校生の声 (抜粋)

- このワークショップで友人を得ることが出来た。お互いを高め合うことが出来る友人が全国にいると思うと楽しい。さまざまな意見を交換する中で、自分の教養のなさにも気が付いた。
- 考えや意見を持つだけでなく、行動に移している人が多いと感じた。自分もこれから行動に移していきたいと思う。
- 関東も関西も関係なく、関心と行動力があれば被災地へのアクションが起こせるのだと分かって感動した。

した。

高橋 被災した人、一人ひとりがそれぞれの体験をされています。私はいくつか聞いて、学校や地域の皆に伝えたいと思います。地元で防災に役立てたいという気持ちもありますが、それ以上に、テレビ画面からだけでは分からない、本当の被災地の様子を知ってもらいたいと思うからです。

全国の仲間との対話で確かめた 高校生の持つ大きな力

12年3月、久保さん、高橋さんの2人は、全国の高校生が震災を契機として彼ら自身の「10年後への決意」を語り合う「高校生未来プロジェクト」(右コラム参照)に参加した。

久保 全国の高校生から復興に向けての思いを聞くことは、自分の今後

の取り組みを考える上で役に立つと思えました。実際に話をしてみると、国会議員になって福祉制度を変えたいなど、夢のスケールが大きいことに驚きました。僕には将来、高校教師になって舞子高校の環境防災科で教えたいという夢がありますが、皆の話聞いて、それは既に用意された枠組みの中の夢でしかないと思いました。今は、高校教師になって

*2012年12月には高校生未来プロジェクト第2回「未来と学問を考える」(仮)開催予定

も勉強を続けて、防災教育の仕組みを国に提言できるようにしたいと考えてられるようになりました。

高橋 私は環境防災科にいるため、ボランティアに行く機会も多いのですが、他の参加者は自分で決意し、行動していました。ゼロから支援をしている子たちの話を聞いて、自分とは気持ちの強さが違う、もっと私も動いていきたいと思いました。

2人は、人にはそれぞれの体験、考えがあることを改めて実感した。

高橋 同じ高校生でも、10年後に起

生徒の行動を 教師はどう見守ったのか

被災地での支援ボランティアという体験の中で、生徒はどう動いたのか。教師はどのような気持ちで生徒を見守ったのだろうか。

高校生は、お年寄りからすれば孫のようなもので、子どもからすれば一緒に遊んでくれる兄姉です。幅広い世代から受け入れられる存在が高校生です。彼らの人とつながるパワーを生かすのは大人の役割であり、その場は災害ボランティアに限りません。

被災地支援では、生徒は自分の無力さを受け止めることを求められます。1人では厳しくても、仲間がいれば頑張れます。だから友人と語り合う時間は貴重です。そして、気持ちをどう整理するか、教師が教えることも大切です。無力さに肩を落とす生徒には、無力で正しいと言ってやらなければいけません。1日に出来ることには限りがあり、朝と夕を比べてもほとんど片付いていないように見えるかもしれない。それでも、被災地の人は心を込めて「ありがとう」と言ってくれる。それは生徒の自己肯定感につながります。その自己肯定感を土台に、「もっと大きな存在になるために今やるべきことが勉強なのだ」と気付かせる。そうやって、生徒が自分の行動を整理できるよう、教師が解釈して伝えることが大切だと思っています。(環境防災科長／諏訪清二)

こした行動はさまざまでした。でも、「日本を良くしたい」という思いは同じでした。だから、自分にはない考えでも「それはいいね」と賛同できたんです。お互いに、相手の正直な考えや長所を引き出し合っていた気がします。普段の学校生活でも、こういう体験がもっと出来たら楽しいだろうなと思います。

久保 皆自分の意見をしっかりと持っていました。復興についても、高校生に出来ることはないなんて、誰も思っていないんです。僕らの泥か

きだって、少しずつしか片付いていないかもしれないけれど、皆で積み重ねていけばいつか片付くはずですよ。被災地で見聞きしたことを僕が話す

葛藤しながらも対話を続け、 他者とのつながりの中で学び続ける

福岡県立修猷館高校

お話を
うかがった方々

岡本佳祐さん(2年) 浦越有希さん(2年)
山本明日香さん(2年)

「被災地の現状を確かめたい」
思いに共感し、戸惑う生徒たち

福岡県立修猷館高校は、2012年1月、研修旅行(修学旅行)を実施した。2年生約360人が向かったのは当初の予定の長野県ではなく宮城県。「世のため人のために尽くせる人であれ、と日々生徒に語り掛けてきた学校として、将来を担う彼らに被災地の現状を自分の目で確かめさせたい」という思いから、前年6月、中嶋館長の提案により行き先が変更

ことで、それを聞いた誰かが新たに募金してくれるかもしれません。高校生は微力かもしれないけれど、出来ることはきっとあります。

となった。生徒たちは「高校生の自分が被災地に行けるのは貴重な経験」
「少しでも復興の役に立てるなら」と館長の意図を理解しながらも、戸惑いを隠さなかった。

浦越 確かに素晴らしいことだと思いますが、決め方に納得がいきませんでした。修猷館は生徒の自主的な活動を尊重する、自由闊達な校風なのに、生徒の意見を聞くことなく、行き先が変更になったのですから。
岡本 一番悲しかったのは、行き先が変わったことで、参加を取りやめ

*プロフィールは2012年3月時点のものです

る生徒が出たことです。長野ならほとんどの生徒が行けたはずでした。

議論を重ねる中で表れた 生徒たちの変化

6月8日、生徒向けの説明会で中嶋館長は、「将来の日本を背負う君たちには、ぜひ被災地へ直接赴き、見て、聞いて、感じてほしい。意見がある人は館長室へ。扉はいつでも開けておく」と語り掛ける。

浦越 その日の夕方、私は館長室を訪ねました。「行き先を変えたことで参加できなくなった生徒がいます。仲間と一緒に過ごす研修旅行は、高校生活の中でも大切な時間です。そういう貴重な体験が出来なくなった生徒がいることに対して、館長先生はどう思いますか？」と尋ねました。すると館長先生は「それについては謝るしかない。ごめんなさい」と頭を下げたのです。その時、私は館長先生の覚悟を理解しました。ここまでのプロセスに納得したわけではなけれど、せっかく被災地に行けるのだから、より良い研修旅行になるように力を尽くそうと思ひ直したのです。だから私は、研修旅行の実行

委員会に参加することを決めました。また、100人以上の生徒が自主的に集まり、生徒だけで各々の思いを語り合った。

山本 私たちはそこで上がった声を意見書としてまとめ、館長先生に渡しました。「私たち生徒はこう考えています。だから私たちにきちんと説明してください」と要望したのです。

A4用紙15枚に及ぶ意見書には、「自主性を大事にする学校なのでは」「皆で行けるはずだったのに」などの言葉が並んでいた。館長と生徒がお互いの思いを率直にぶつけ合っていた。6月11日の保護者説明会では、学校として計画変更の意図を説明。保護者からは余震などへの不安の声が上がった。学校は、そうした意見を受け止め、現地から収集した情報などを丁寧に説明し、理解を求めた。

岡本 その後の学年集会などで先生方の話を聞き、決め方に関して生徒が不満を抱えていることを理解してくれていることは十分分かりました。だから、僕は気持ちを切り替えて参加しようと思ひました。行く以上は研修旅行の企画にもかわらうと思ひ、実行委員を志望しました。

家庭で、そして生徒同士で参加するかどうかの話し合いが続いた。そして最終的に、学年の約2割にあたる80人余りの生徒が不参加を選んだ。

山本 不参加を決めた人も、きつといろいろと考え、家族とも話し合っ

て結論に達したはずだ。だから、私はそれを尊重したいと思ひました。

浦越 仲のいい友だちは、余震や放射線が怖いからと不参加を決めました。私は先生方の説明を聞いて大丈夫だと思ひましたが、本当に自分が正しいとは断言できません。いろいろな考えがあり、それを受け入れることが大切なのだと思ひました。

岡本 不参加を選んだ友だちも、その結論に達するまでに震災のことを真剣に考えたはずだ。だから、不参加だから得るものがないというわけではないと思ひました。

全員が心を1つにして 被災地のことを考えた

研修旅行は3つの行程で実施された。移動を含む全4日間のうち、宮城県での2日間をスキー研修に充てるAコース、スキー研修と被災地な

どこの訪問を1日ずつ行うBコース、そして2日間とも被災地などの訪問に充てるCコースだ。

浦越 私たちはCコースに参加しました。宮城県での2日目には、被災地で活動した医師やNPOスタッフのお話を聞き、多くの人たちが復興のために大変な努力をしていることを知りました。また、宮城県仙台第一高校の生徒と、今回の震災と自分たちの未来について話し合い、当たり前の日常のありがたさにも気付きました。その日の夜の全体会では、各コースの参加者が見聞きしてきたことを話したのですが、Aコースの人、インストラクターの人たちなどから震災のことを教えてもらい、感じたことを積極的に発言してしましました。「Aコースを選んだことに迷いもあつたけれど、こうして皆で話が出来て良かった」という人もいました。

岡本 全体会では、皆こんなに考えていたのかと感動しました。どのコースの生徒もあの時間は、被災地の復興のために、高校生の自分がすべきことを考えていました。全員が心を1つにした瞬間でした。予定の時間を大幅に超えるほどたくさんの方が発言してくれて、うれしかったです。

山本 津波の被害を受けた沿岸部を訪れた時は、1年経っても何も変わっていないことに衝撃を受けました。でも、同じくらい私の心に刻まれたのは全体会です。普段は人前に出たがらないような子が「私たちに出来



写真右から、岡本佳祐さん、浦越有希さん、山本明日香さん
福岡県立修猷館高校◎全日制／普通科／共学。1学年約400人。1784(天明4)年に藩校「修猷館」として創立。修猷館の名は尚書「微子之命」の章句「踐修厥猷」から取られている。

ることは限られているけれど、見聞させたことを多くの人に話すことで、研修旅行に参加した意味が生まれる」と話すのを聞いた時の気持ちは言葉に出来ません。復興には多くの時間が掛かるからこそ、私は見てきたことを多くの人に話しながら、これから自分の力で復興にどうかかわれるのかを考え続けたいと思いました。

被災地を訪れた生徒たちは、「高校生の自分にはこれしか出来ない』などと、自分の力を限定しないでほしい」と言葉を掛けられたという。

浦越 被災地に赴き、現地の方の言葉を受け取ることは、高校生に出来ることの1つだったのだと思います。何もなくなった被災地に立った時の気持ちやうまく言葉にすることは出来ていませんが、それでも多くの人に、家族や友人、そして自分の子どもに伝えていくことが私たちの使命だと思えます。また、研修旅行に参加しなかった人から「福岡でボランティア活動に参加した」とその時のことを話してもらいました。福岡にいても私たちに出来ることは、たく

さんあるのだと気付きました。

岡本 高校生の僕たちが被災地のためにまず出来ること、それは自分自身を変えることだと思います。何を变えるかは人それぞれですが、僕は被災地で話を聞く中で、人と人とのつながりを大事にしたいと思うようになりました。人は1人では生きていけないのだから、頼り頼られる関係を日常生活でもしっかりつくりたいです。研修中、貴重な体験をする

度に僕は「館長先生はこういうことも見越してチャンスをつくってくれたのかなあ」と思いました。最初に行き先変更を聞いた時は、戸惑いもあつたけれど、先生たちがいなければこの研修旅行は実現できませんでした。だから僕は、先生たちとの「つながり」にとっても感謝していますし、いろいろな人とのつながりの中で多くを学んでいることをこれからも忘れないでいたいと思います。

生徒の葛藤と成長 教師はどう受け止めたか

葛藤する生徒たちを支えながら、被災地での研修旅行実施までの7か月を過ごした修猷館高校の教師たち。生徒たちの内面に、どんな成長を見いだしたのだろうか。

◎確かに生徒の自主性は大切ですが、今回の震災のような大変な出来事と生徒が向き合うためには、学校として何らかのきっかけを与え、メッセージを発するべきだと思いました。震災をきっかけに社会や自分の将来について日本の高校生が考えを深められないとしたら、その原因は生徒にあるのではなく、明確なメッセージを打ち出せず、考える機会も生徒に提供できていない学校側にあると私は思います。(館長／中嶋利昭)

◎研修旅行先が変更になったことで、生徒たちは参加するか否か、価値観の対立に直面しました。生徒同士で乗り越えられるのかという不安もありました。しかし、生徒たちは旅行の前後で語り合い、自分とは違う考えの仲間を理解しながら、自分をも見つめ直すようしていました。普段の授業では出来ない体験の連続だったと思います。(2学年主任／渡邊康宏)

◎4日間の研修だけでなく、研修が終わるまでの出来事全てが貴重な体験だったと生徒は言います。研修後も見てきたことを先輩や1年生に一生懸命話していましたし、研修旅行に不参加だった生徒も、堂々と自分の考えや経験を学年集会などで語っていました。皆で語り合うことの大切さを身をもって学んだ7か月だったと思います。(2学年副主任／田中隆世)

*プロフィールは2012年3月時点のものです。 *中嶋先生は2012年4月より、福岡県・私立筑紫女学園中学・高校校長